

<学術論文>

手話の社会的認知の過程ときこえない人へのまなざしの変容

— 映像メディアを中心とした社会的背景の分析 —

西 田 朗 子

東亜大学 医療学部 医療工学科 医療福祉コース
a-nishida@toua-u.ac.jp

《要 旨》

手話が言語として認められるまでには、様々な要因や社会的背景があった。本研究では、手話が社会に認知されていく時期を大きく3つに分け、社会における手話に対する認識の変化を分析する。手話は、明治期のろう学校で誕生、発展したが、その後のろう教育で手話による教育が禁じられ、口話法による教育が長く続いた。きこえない人たちは日常の会話の手段として手話を手放すことなく使ってきたが、そこには障害者差別といえる侮蔑的なまなざしがあった。

第2次世界大戦後、映像メディアが発達し、きこえない人が登場する映画が作られるようになり、きこえる人が手話を学ぶ動きがでてきた。「手まね」から「手話」という言葉が使われるようになり、やがて、国際障害者年の前後には手話を学ぶ人がまた増えた。ここまでを第1期とする。そこには、きこえない人の役に立ちたいとの思いから手話を学ぶという姿勢があった。

1990年代から2000年代にかけて、きこえない人が主人公となるテレビドラマが複数放送された。この第2期においては、「手話はかっこいい」「手話は魅力的」と、差別的な見方から一転し、手話に対する見方を大きく転換する力が働いた。一方で、きこえない人の内実や生活困難は取り上げられず、手話だけが一人歩きする状況となった。第3期は、2022年以降から続く現在で、複数のテレビドラマや映画できこえない人の多様性、周囲の人も含めたきこえない人の暮らしが描かれるようになった。また、手話にも様々な表現、多様性があり、きこえる人がきこえない人という「マイノリティとどう付き合うか」という課題を示すように変容している。

キーワード：手話，社会的認知，認知の変容

<目次>

1. はじめに
2. 「手話」という言葉が使われるまで
 - 2.1 映像に現れる以前
 - 2.2 映画「名もなく貧しく美しく」の公開（映像メディアでの登場）
 - 2.3 映画における手話の扱われ方
 - 2.4 制作者、演者の視点
 - 2.5 手話を学ぼうとする人々の出現
3. 手話ブームの変容
 - 3.1 大きな3回の手話ブーム
 - 3.2 テレビドラマの影響
 - 3.3 テレビドラマにおける手話の扱われ方

- 3.4 「手話は魅力的」という見方
- 3.5 手話ブームと手話の多様性
- 3.6 映像に現れるきこえない人
- 4. 多様なきこえないこと、きこえない人
 - 4.1 テレビドラマの設定の変化
 - 4.2 制作者側の意識変化
 - 4.3 きこえない人の周辺を描く作品
- 5. おわりに

1. はじめに

手話は「見る言葉」つまり、視覚言語である。音声言語であれば、お互いが見えていなくても声を聞くことができ、会話もできる。しかし、手話の場合、話し相手が目の前にいるか、映像で相手が見えていなければ何を話しているのかわからず、会話が成立しない。

手話と音声言語の違いは、人のコミュニケーション手段の物理的効率にかかわるだけでなく、きこえない人が主流の社会にあっては、諸制度と価値意識の軽重を引き起こし、行動様式や思考様式の違いは、きこえる人にとっては理解し難く、きこえない人へのまなざしには侮蔑的なものが含まれてきた。

例えば、1923（大正12）年生まれの西田一は、在学していた京都府立医科大学予科で学んでいたが、17歳で失聴したため医師となるのは諦め、他の大学等を探して受験しようとしたが排除されている。

各大学では、入学試験で、身体検査が実施され、「耳の聞こえないもの」はこの身体検査で「就学に適しない」と判定され、排除されました。〈耳の聞こえないものが、どうして大学の講義を聞くのか。とても無理に違いない〉というのがこの当時の常識でした。

病後、私は元女学校校長など、縁故を辿って、立命大予科（文科）他を打診しました。けれど“身体検査ではねられる”を理由に、婉曲に断られました。門前払いで

す。本人の勉学意志、学力の有無は問題になりませんでした（西田1999）。

西田の場合、失聴した年齢が成人に近く、学力も高かったことから、ろう学校にも入学を拒まれ、「私は一体どこに行き、なにをすればよいのか、進路を探ることから始めなければなりませんでした」¹と、非常に厳しい状況に置かれていた。また、徴兵検査で「おまえは不忠者である。非国民。丁種不合格」²と書かれた悔しい思いをしている。

戦後、24歳で再度ろう学校と交渉して入学を許可され、職業科紳士服科で縫製を学び始めたが、ろう学校の先生から、身体検査では適当に聞こえるふりをしたらよいと受験を勧められ、立命館専門学校（旧制夜間）国語科に入学している。

西田は、失聴後に手話があることを知ったが、習得する環境には恵まれなかった。戦後に入学したろう学校時代に、学校では手話を禁止されていたため、友人に自宅に来てもらい、手話を学んでいる。

手話は、きこえない人が集まる最初の場となった明治期のろう学校が手話の始まりとされている。きこえない人の間で、共通の言語として手話は発展していくのだが、音声言語が主流の社会においては、きこえる人が目にする機会は限られており、ろう教育においても手話が禁止された時代が続いた。

西田のような中途失聴者でも、失聴後、ろう学校を見学し、授業では口話が使われていたものの、休み時間に生徒が手話を使って話しているのを見て、初めて存在を知ったという。口話

とは、口の動きを読み取って理解し、表現したい言葉を声で発話することである。ろう学校では、口話訓練が行なわれていたが、きこえない人にとっては、自分の声も当然聞こえず、訓練しても習熟するのに時間がかかり、発声には個人差が大きい。

一方、1982（昭和57）年生まれで、生まれつききこえない春日晴樹は、両親ともにきこえない。4歳からろう学校に通い、口話訓練を受けたが無意味だったとしている。小学校高学年からは一般の小学校に通い、高校からろう学校に戻っている（春日2021）。

一般の小学校に転校したのは、母親の「ろう学校は手話を禁止されているので、息子は先生の話が理解できない。先生の話がわからないのは、耳が聞こえる人が通う学校に行っても同じだろう。だったら、口話の訓練ばかりに時間を費やすろう学校で学ぶより、耳が聞こえる人が通う学校に行かせて授業やクラブを通して、耳が聞こえる友達との交流をたくさんさせたい」³という意向があったためである。

高校からろう学校に戻ったのは、1990年代以降、手話で授業をするろう学校が出てきたことが理由となっている。

このように、生まれた年代や生育環境、成長期の社会の状況によっても、きこえない人が手話を獲得できる環境は異なり、きこえる人や社会との関わり方にも個別性がある。

ろう学校で手話が禁止され、一般社会でも認知されてこなかった理由の一つに、手話が言語であるかどうか、ということがある。それが転換を見せたのは、2006（平成18）年12月の国連総会で採択された障害者の権利に関する条約（以下、「障害者権利条約」とする）で、「手話は言語である」ということが示されたことである。

第2条に『「言語」とは、音声言語及び手話その他の形態非音声言語を言う』と初めて明記された⁴。

手話が言語であると示されたことは、1880（明治13）年に行われた、ろう教育者の集まりである第2回国際ろうあ教育会議（イタリアのミラノで行われたためミラノ会議と言われる）

で口話法による教育が推奨され、世界のろう教育法の主流が口話教育になり、口話法が長く続いてきた状況を覆す機会を作ることとなった。

口話法推奨が否定されるのは、障害者権利条約採択後の2010（平成22）年、国際聴覚障害教育会議（国際ろうあ教育会議が発展したもので、カナダのバンクーバーで開催されたため、バンクーバー会議と言われる）⁵である。

日本で初めて手話が言語として明記されたのは、2011（平成23）年の改正障害者基本法の第3条である。「全て障害者は、可能な限り言語（手話を含む。）その他の意思疎通のための手段についての選択の機会が確保されるとともに、情報の取得又は利用のための手段についての選択の機会の拡大が図られること」とされた⁶。

2013（平成25）年には、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）が成立し、障害者への合理的配慮が求められるようになった。きこえない人への合理的配慮としては、手話通訳の配置や要約筆記の配置、筆談、字幕等の文字情報を提供することで、社会生活上のコミュニケーションを円滑にすること等が障害者差別解消法のリーフレットに掲載されている⁷。障害者福祉の法制度でも手話が認知され、かつその具体化方向が提案されるようになっていく。

これらの法制度の整備には、きこえない人が展開してきたろうあ運動の影響もあるが、手話が一般の人々に認知されるようになったことも大きな力となっている。視覚言語である手話が、どのように認知されていくかという過程には、新聞記事などの紙媒体や映画やテレビドラマなどの映像メディアの影響が大きい。

本研究の目的は、明治期以降、社会が手話と手話に関わる人々をどのように捉え、扱ってきたのかを、新聞記事、映画、テレビドラマ等のメディアの内容を参照して、近代の障害者観、ろう者観の変容という観点から分析することによって、その変容過程の一端を明らかにすることである。

以下、きこえない人と手話に関わるまなざしの変容の過程を三つの時期に区分して、その具

体的な内容を見ていきたい。

第1期は、明治期以降にろう学校が設立され、手話が使われるようになった時期から、きこえない人が初めて映像メディアに登場したと考えられる1961（昭和36）年公開の映画「名もなく貧しく美しく」の公開を経て、1981（昭和56）年の国際障害者年前後の手話ブームの時期までである。

第2期は、1990年代から2000年代にかけて、手話を使うきこえない人が主人公のテレビドラマが複数放送され、手話に対する社会的関心が急速に高まった時期である。

第3期は、直近の2020年以降から現在に至る、きこえないことの多様性や、きこえない人の周辺にいる人々に目を向けたテレビドラマが放送された時期である。

また本研究では、きこえない人や手話通訳者などの関係者が、どのような時期にどのようなろうあ運動（きこえない人の障害者運動）を展開してきたかにも着目するが、社会的変化への反映として考える。

なお、本研究においては、一般的にろう者、中途失聴者、難聴者と分けて記述されていることが多い聴覚障害者を「きこえない人」という呼び方で総称している。

理由は、きこえの度合いに関係なく、手話をコミュニケーション手段として使用する人を含めて指すためである。ろう者、ろうあ者と呼ばれる人だけではなく、きこえの度合いに関係なく自身がろう者、ろうあ者という自覚を持って生きている人もいれば、難聴者と呼ばれる人であっても手話を使っている人もいる。人生の途中できこえなくなった中途失聴者でも、失聴の時期や環境によって状況は異なり、手話を使う人もいれば、まったく手話を習得せず、音声言語や文字情報を使って生活している人もいる。身体障害者手帳の等級では規定しきれない「きこえないこと」があるからである。

また、「きこえないこと」には、自然に音が入る意味の「聞く」と、耳を傾けて意識的に「聴く」の両方が困難であることを含むため、ひらがなで「きこえない人」としている。

見えない障害である聴覚障害は、その違いは外から見てわかるものではなく、個人的な交流の中で徐々に理解していくしかない。きこえの度合いにしても、きこえるか、きこえないだけでなく、例えば、音があることはわかっても、声、言葉として認識できない人もいれば、補聴器を付ければ、対面での日常会話はほぼ可能という人もいる。個々のきこえ方がどんなものかは、想像するしかない。また、ろう学校での口話訓練や、聴力喪失前の声の記憶から、声を使う人もいれば、声は出さないと決めている人もいる。

そして、きこえない人に対応する言葉として「きこえる人」という呼称を使用する。文献等で使用されている場合は、ろう、中途失聴、難聴、聴覚障害等の表記に従って記述する。

本研究での新聞記事は、ほぼ朝日新聞クロスサーチおよび朝日新聞縮刷版からの引用である。他紙も参照したが、手話やきこえない人に関する記事は、本研究で第1期として規定した明治から昭和期前半、とりわけそれらが映像メディアに取り上げられるようになる1960年代以前の時期には極めて僅少であったことを付記しておく。

2. 「手話」という言葉が使われるまで

2.1 映像に現れる以前

手話が視覚言語である以上、それを目にするためには、実際に見るか、映画やテレビドラマなどの映像を通して見るしかない。映像メディアの出現以前では、文章で書かれたものや写真から想像するしかない。手話について記述されたものは、ろう教育の専門書籍や当事者団体の発行物を除けば、筆者が探した限りでは僅かしかなかった。ここでは、朝日新聞の記事を紹介する。

朝日新聞に最初に掲載されたのは、1881（明治14）年11月の記事で、「啞が掏摸を捕えた」というもので、「口訴でない手訴」で訴えたがわからないので、警察署に連れていくと、盲啞学校の学生が住所姓名等を「立派に書いて掏摸につけて引き渡し」たとある。ここでは、きこ

えない人でも読み書きができることに感嘆していることが強調されている。明治期はろう学校（当時は盲啞学校、後に盲学校とろう学校に分離）が設立された時期で、手話がおそらく手話のことであり、手話で話し、読み書き等の教育も受けていたことが示されている。

次に見られるのは大正期である。1917（大正6）年10月には、東京聾啞学校に皇后が行啓したという記事で、「生徒の巧みな手話法にて対話演習を御覧に入る」とある。教育の場で手話法が使われていたことがわかる。

昭和に入って、1931（昭和6）年1月の記事には、「手まねの会話」の見出しで、内容は、アメリカで流行している手真似会話を研究している東京盲啞学校の卒業生が、騒音に悩まされる航空勤務者に手真似を適用すれば有効だとし、教授することになったというものである。

1937（昭和12）年1月には、東京の市立聾学校幼稚園新設の記事で、「最近の聾生徒教授法は手話法から口話法に移り東京市でも率先してその方法を採用しこのためにはどうしても幼時より教育することが必要なため幼稚園を設けるに至った」とある。

昭和に入ってから2件の記事しかないが、成人が使うものには「手まね」「手真似」、教育法としては「手話」法と使い方が分けられていることがわかる。一般的に「手話」ではなく、「手まね」と言われていたということである。

明治期から昭和初期の記事が少ないことは、きこえない人に対する社会の関心が薄かったことを示しているが、それでも、明治期には手話法での教育が採用されていたものが、昭和になって手話法から口話法に移行したことが明記されている。手話は動きのある「見る言葉」であり、記事や写真では伝えることが困難である。社会の関心が薄く、直接見かける機会も少ないことから、社会に認知されるためには、動画を映し出すことができ、人が手話表現をしている様子がわかる映像メディアの出現を待たねばならなかった。

2.2 映画「名もなく貧しく美しく」の公開（映像メディアでの登場）

きこえない夫婦を主人公にした映画「名もなく貧しく美しく」が公開されたのは、1961（昭和36）年である。配給収入が2億5154万円とヒットしており⁸、その後、1976（昭和51）年、1980（昭和55）年にはテレビドラマも制作された。

本格的に映像メディアの中で手話が見られたのは、この映画が最初であったと考えられる。この映画では、きこえない夫婦の会話では手話が用いられ、字幕でその内容が観客にわかるようになっている。

ストーリーは、きこえない夫婦が第2次世界大戦後の暮らしの困難を過ごしていく様子を描いたものである。妻の秋子は、幼い頃に病気で聴覚を失っている。戦争末期に、秋子は空襲の焼け跡で赤ん坊を保護し、嫁ぎ先に連れ帰ったが、冷たい家族は秋子の留守中に赤ん坊を孤児の収容施設に入れてしまった。

終戦後、夫の死と共に、あっさりと嫁ぎ先をほうり出され、実家に帰った秋子は、ろう学校の同窓生の道夫と再会し、結婚を申し込まれた。秋子はためらったが、道夫は手話で「僕は昼も夜もあなたの分まで働きます」と語り、再婚する。

やがて生まれた赤ん坊がきこえるのかどうか不安が続いたが、子どもが茶碗の音を確かに聞き分けていることがわかり、二人は喜ぶ。しかし、夜中に泣いているのを、秋子も道夫も聞くことができず、気づくことなく死なせてしまう。

やがて、息子の一郎が生まれ、道夫は印刷所で働くようになり、秋子は裁縫の内職をしながら育児をし、多忙な中でも幸せであったが、一郎は両親の障害を理由にからかわれ、乱暴な態度を取るようになる。

秋子の弟は素行が悪く、刑務所から出所した弟は、秋子の内職の道具であるミシンと道夫の給料を力づくで奪い、ミシンを売り払ってしまう。秋子は身内が夫に迷惑をかけていることを悩み、置き手紙を残して家を出て、電車に乗るが、手紙を見た道夫も電車に乗り込み、開かな

い連結扉のガラス越し手話で「あなたの苦しみは私の苦しみです。二人で助け合っていくという約束を忘れたのですか」と語りかけ、二人は家に戻る。

息子の一郎は成長し、友人たちに躊躇うことなくきこえない母を紹介するようになる。秋子と道夫は貧しくとも幸せだと語り合うが、戦争中に助けた赤ん坊が成長して訪ねてきた際、追いかけて通りに走り出た秋子はトラックにはねられて死んでしまう。トラックのクラクションは、秋子にはきこえなかったのだ。父親である道夫と息子の一郎が、母が亡くなっても、一生懸命生きていこうとする場面で終わる。

2.3 映画における手話の扱われ方

映像表現で描かれる手話は、夫は手話のみで声がないが、妻には声があり、夫とは手話で会話をする。妻は、きこえる周囲の人と口話で会話ができることになっている。夫はきこえる人の口を少しは読み取るが、身振り程度でコミュニケーションをとっている。筆談はほとんど出



写真1 映画「名もなく貧しく美しく」ポスター
(出典) 映画.com <https://eiga.com/movie/38358/photo/> (2023年5月30日閲覧)

てこない。

夫婦の手話での会話は、列車で隣の車両にいる夫と手話で会話する場面が印象的に描かれる。連結扉で隔たれていると、きこえる者同士の声での会話は列車の騒音にかき消され通じないが、手話だからこそ会話が成立するというのが、映像ではわかりやすく伝わるようになっている。手話での会話は、字幕で会話の内容が表示される。

秋子の声は、多少イントネーションが不自然にきこえるが、会話は口話で十分成立するという設定である。話し相手の口元をほぼ正確に読み取っている。

2.4 制作者、演者の視点

映画公開前の1960(昭和35)年8月22日の朝日新聞には、「数年前日比谷でクツミがきのろうあ者を知ってから、ずっとこの題材を考えていた。10年かからなければ社会の一単位になれなかったろうあ夫婦の姿、ものいえぬ人間から正否をはっきりいえる子どもが生まれ、育っていく物語を、ろうあ者だけの話としてではなく描いていきたい」という松山監督の言葉が掲載されている。

また、演者の秋子役は高峰秀子、道夫役は小林桂樹で、同新聞では、2人の様子と字幕について、次のように伝えた。

「この映画で小林桂樹は全く声の出ない完全ろうあ者、高峰秀子は音声をとまなう口話ができるという役なので、二人とも、いまがり版ずりのテキストと、ろうあ者を先生に連日手まねによる会話の練習に一生懸命。高峰が小声でゆっくりセリフをいうと、小林は指、手、表情を使って話していく。機械的に手まねをおぼえるのは簡単だが、自分の気持ちをいっしょに表現していくのがむずかしいと小林はいい、一方の高峰は相手の演技が終わったことを知らなければ自分のセリフはいれないので、小林のセリフ(しぐさ)も全部おぼえなければならぬから大変だ。画面では、この夫婦の会話の部分に、外国映画のように字幕を

入れて観客にわからせるという。長い会話がくりかえされるが、ろうあ者でも自分のいたいことをこれだけいえるんだという意味で、字幕を省略したくないと松山監督はいう。そして、長い字幕をいかに読みやすくするかを、あれこれテストして研究している」

この記事では、手話という言葉は使われていない。「手まね」という言葉がまだ一般的だったことがわかる。しかし、映画公開後の1961（昭和36）年1月20日の同新聞の記事では、「ろうあ（夫婦）の苦労を描いたもので、二人の手話（指の動きで行なう会話）は字幕を使っている」と手話とその言葉の意味が括弧書きで紹介されている。

しかし、翌年、1962（昭和37）年9月7日の記事では、手話という言葉は使われず、「名もなく貧しく美しく 米国ろうあ者に大うけ」と題して、映画がアメリカのロサンゼルスで上映され、「日本のろうあ者の手ぶりとアメリカのそれと比べあい」「アメリカのろうあ者はアルファベットを使うが、日米共通のサインもあり、理解できるらしい」と書かれている。

松山監督の「10年かからなければ社会の単位になれない」は、きこえない人に対する見方が非常に厳しかったことを表している。また、「ものいえぬ人間から正否をはっきり言える子どもが生まれ」は、現在でいうCODA（Children of Deaf Adults）、きこえない親から生まれた子どもを取り上げているが、明言はしていないものの、きこえない人が子どもを育てること、それも、きこえる子どもが生まれていることに驚きというより侮蔑的なニュアンスが感じられる。

一方で、「ろうあ者だけの話としてではなく描きたい」としている。闇市でサツマイモを売り、靴磨きをして糊口を凌ぐという、きこえない人が「名もなく貧しく美しく」懸命に生きる場面から、自分たちもしんどい思いをしたが、ろうあ者はもっと大変だと同情し、米よこせデモやストライキなどの社会的事件の場面から、人々がそれぞれの戦後の混乱期に苦労したこと

を思い出し、大変な時代を生きただけに共感することを狙いとしていた。

2.5 手話を学ぼうとする人々の出現

映画公開と同じ年、1961（昭和36）年、日本初の手話サークルである、京都市手話学習会「みみずく」が誕生している。翌年には神戸市でも手話サークルができ、その後、手話サークルが全国各地で立ち上げられるようになった。

これは映画公開の影響というよりは、潜在的にきこえる人がきこえない人と話したい、手話を学びたいという欲求があり、具体化した時期であったと考えられる。

例えば、京都市手話学習会「みみずく」の設立のきっかけとなったのは、ひとりの看護師が手話を学びたいと、当時、京都に2人しかいなかった手話通訳者につながり、ろう学校教師でもあった手話通訳者から、ひとりで学ぶのではなく、集団で学んだ方が良いとの助言を受け、職場の人や友人を集めたのが始まりである。看護師は、入院してきたきこえない人が、医師や医療関係者とのコミュニケーションが上手くいかず、問題視されている反面、お見舞いにきたきこえない人とは、手話でスムーズに会話をしているのを見て、きこえない人に問題があるのではなく、きこえない人の言葉がわからないから、コミュニケーション不全になっているのだと気づき、手話を学びたいと考えた。

翌年以降、他の地域でも手話サークルが次々に設立され、最初の手話ブームといえる状況が生まれている。映画の影響はあったにせよ、潜在的に手話を学びたいという、きこえる人の存在があった。

しかし、手話サークル「みみずく」会員によれば、1963（昭和38）年頃の経験として、知り合いのきこえない人と一緒にいた時、それまで手話で話していたのに、バスに乗ったとたん話しかけても無視をされた。おかしいと思いながらバスを降りると、「人目のあるところでは、手話で話しかけるのはやめてくれ」と言われた。ろう学校に一般市民からよく「バスや電車で手話をしているのを見た。気持ち悪いからやめさせろ」という内容の投書がきていたから、

注意していたようだ、と回想している（全日本ろうあ連盟 1998）。映画「名もなく貧しく美しく」により、手話の存在が少しずつ社会的に広まってきたといっても、まだまだ差別的な扱いを受けていたことがわかる。

3. 手話ブームの変容

3.1 大きな3回の手話ブーム

手話ブームは、これまでに3回あったと言われている。1回目は、先述の1960年代に徐々に増えた手話サークルの存在が大きい。1968（昭和43）年3月2日の朝日新聞は、「手話で障害者の友人に」と3月3日が「耳の日」であることを紹介し、手話学習者が増えていることを伝えている。

耳の不自由に耐えて、学校や職場でがんばっている人も多い。一方、こうした人たちと周囲との潤滑油になろうと、東京や京都、横浜などでいま「手話」を習う人が増えているという。

この記事では、手話は「手まねで話をするやり方」とし、「現在、ろう学校では、口の動きを読み取って発声できるようにする口話法一本やりで、手話は教えていない」と指摘している。教育の場で使用されていないのに、きこえない人の言葉として手話が一般にも知られるようになってきている。

1970（昭和45）年には、厚生省の手話奉仕員養成事業が開始され、各地で手話講習会が開かれるようになった。手話通訳奉仕員養成事業は、身体障害者社会参加促進事業の補助事業として実施された。手話奉仕員は聴覚障害者と日常的に関わり支援をするものであり、その実施要項では、養成対象者は「福祉に熱心な家庭の主婦等」となっていた⁹。手話通訳者養成ではなく、手話のできるボランティアの養成が目的である。ろうあ運動では、手話通訳の制度化を要求してきていたが、実現はかなわず、まずはボランティアの養成からスタートした。この手話奉仕員養成事業は現在も継続しており、手

話通訳者養成事業の手話通訳養成講座に進む前の、入門編のような位置づけとなっている。

手話が少しずつ浸透してきている1977（昭和52）年、秋田県福祉大会において、目ざわりだとして、県の課長指示で手話通訳が中断されるということが起きた。手話通訳者は、この大会で表彰されるろうあ協会のきこえない人のために配置されていた。「福祉の充実、強化を図ろう」という趣旨の大会で起きたこのハプニングを県当局は『運営上の不手際』と釈明しているが、各福祉団体は『県幹部の障害者に対する差別感の表れ』と怒っている」と新聞で報じている¹⁰。後日、県知事が陳謝しているがろうあ協会はこれを拒否している¹¹。手話を学ぶ人が増えたとはいえ、きこえない人への差別意識はまだ根強いことを示す事件である。

2回目の手話ブームは、1981（昭和56）年の国際障害者年の前後である。国連が旗振り役となり、日本国内だけでなく、海外の様々な障害者の様子や暮らしの様子がテレビ等で放映され、人々の関心が集まった時期である。これまで、施設や自宅に閉じこもりがちだった障害者を街中で見かけるようになった。

手話に関係することでは、1979（昭和54）年、きこえない俳優が手話で演技をするアメリカ・デフ・シアターが来日し、国内12カ所で公演を行なっている。この公演は、俳優の黒柳徹子の呼びかけによるもので、国内の公演では黒柳も出演している¹²。黒柳はベストセラーとなった著書「窓ぎわのトットちゃん」の印税を用いて社会福祉法人トット基金を立ち上げ、手話演劇を育てようと「日本ろう者劇団」を付帯劇団とし、支援を続けている。

1980（昭和55）年頃には、「手話でご用件をうけたまわります」などの見出しで、銀行に手話のできる女子行員を窓口を設置したという記事が複数ある¹³。これは、国際障害者年を受けて銀行側がみせた対応であり、手話が社会的に浸透してきていることを示しているが、それと共に、同年、民法11条の改正が施行されたことが背景にある。

民法11条には、「心神耗弱者、聾者、啞者、盲者および浪費者は準禁自治産者として、これ

に補佐人を附すことを得」としていたが、法改正により、聾者、啞者、盲者が削除されたのである。これまで、きこえない人や盲人は、所得や財産があっても、実質的に銀行で住宅ローンを組むことができなかったが、民法改正により可能になったということである。

民法11条改正は、当時、ろうあ運動の柱として掲げられ、国会に訴えるなどの運動が繰り返されてきた。当時の全日本ろうあ連盟の書記長であった高田が参考人として国会に出席した後、銀行協会などの連合体は、傘下の銀行や信用金庫にきこえない人など障害者に対して差別的な扱いをしないようにと通達を出している(全日本ろうあ連盟1998)。ろうあ運動の成果として、手話のできる女子行員の配置につながったともいえる。

そして、3回目の手話ブームは、1990年代以降に放送されたテレビドラマがきっかけとなっている。

3.2 テレビドラマの影響

1995年4月から9月日本テレビ「星の金貨」、7月から9月TBS「愛していると言ってくれ」が相次いで放送された。

「星の金貨」は、きこえない女性ときこえる男性とのラブストーリーである。北海道の診療所に住む、生まれつききこえない女性、彩は捨て子である。彩が愛したのは、この診療所に赴任してきた医師の男性、秀一だった。秀一は彩と会話するために手話を覚え、秀一は彩と結婚の約束をするが、東京に出て行った秀一は帰っては来ず、秀一を探し、彩は東京に出た。東京で右も左も分からぬ彩が出会ったのは秀一の弟拓巳で、拓巳も彩と話すために手話を覚える。

拓巳と知り合ったことで秀一が事故で入院し、記憶を失った事を知る。病院で働きながら秀一を見守り、やがて秀一は記憶を取り戻し、再び結婚の約束をする。しかし、秀一と別の女性との間に子どもができたことが分かり、彩は1人で北海道に帰る。彩を追い掛けてきたのは秀一ではなく拓巳で、彩と暮らし始める、というストーリーである。

主人公の2人の物語の間に、大病院組織内の

勢力争いや、主人公のふたりそれぞれが別の人から思いを寄せられるなど、様々なエピソードが組み合わされており、きこえない人は主人公以外にはほとんど登場しないが、手話のできる、きこえる友人は登場する。

「愛していると言ってくれ」は、きこえない男性ときこえる女性のラブストーリーである。きこえない男性、晃次は、7歳で失聴しているという設定で、手話ができる人とは手話で会話をし、できない人とは筆談を使っている。きこえない晃次ときこえる紘子が出会い、恋に落ち、晃次と話すために紘子が手話を学んでいく。

きこえることと、きこえないことのすれ違いが様々な形で描かれ、紘子が人目を憚らず手話で話そうとすると、晃次が「君まで耳がきこえないと思われる」と制する場面や、紘子が晃次とやり取りをするために、当時は高額だったファックスを、無理をして購入する場面がある。また、晃次の母親は、晃次がきこえないことを苦にして、家を出ており、血のつながらない妹は兄に思いを寄せ、手話で会話ができることになっている。

2人での会話は筆談から徐々に手話に移っていくが、紘子が手話をするのはしんどいと怒り、「あなたの声がききたい」と紘子が晃次に迫る場面があり、7歳で失聴した晃次が、声を使うことなく暮らしてきていることがわかる。

きこえることときこえないことの差異が強く表現されて、それらを乗り越えて最終的に結ばれるというストーリーである。

2004年には、TBS「オレンジデイズ」が放映された。こちらは、きこえない女性ときこえる男性のラブストーリーで、大学生の友人グループ内での交流を交えながら、恋愛が描かれている。きこえない女性は4年前に失聴しており、手話のできる友人とは手話で話し、伝わらない人とは筆談を用いている。携帯電話のキャリアメールを使った会話も使われている。

相手役のきこえる男性は、大学で社会福祉を学んでおり、手話ができるという設定である。主人公のきこえない女性は、グループの友人たちも手話のできることで、グループ内では手話で

会話することができるが、手話のできない人とのコミュニケーションで躓くことがある。筆談をしようとしても嫌がれたり、面倒がられたりすることがあるからだ。中途失聴となったことで、主人公はバイオリニストになる夢を諦めている。このテレビドラマでも、きこえる男性が、声を使わずに生活しているきこえない女性に声が聞きたいと求める場面がある。

3.3 テレビドラマにおける手話の扱われ方

いずれのテレビドラマも、手話を使っている場面では字幕が使われていることもあるが、きこえる人ときこえない人の会話の場面では、手話を読み取った相手（きこえる人）が音声のセリフとして言い直す手法が多く採られている。きこえる人が手話を使う時は、音声のセリフと合わせて手話表現をしている。

また、主人公のきこえない人以外には、きこえない人はほとんど登場しない。これは、「名もなく貧しく美しく」にあったような、きこえない人同士の手話での会話はほぼ登場しないということである。きこえる人で、手話のできる家族や友人は登場しており、いわば「きこえる社会の中で生きるきこえない人」が描かれ、きこえない主人公は複雑な思いと孤独を抱えていることが表されている。

3.4 「手話は魅力的」という見方

朝日新聞 1995年9月2日の記事では、「愛していると言ってくれ」のプロデューサー、貴島誠一郎が手話を取り入れた狙いとして、「愛しているとか好きだとかいう言葉が頻繁に使われるので、今は言葉の持つ意味がとても軽くなっているんじゃないか。だから言葉を使うより手話の方が感情を強く、やさしく訴えることができる。言葉では嘘をつけても、表情はごまかしがきかないだけに、より真実の愛に近づけるのではないだろうか」としている。

手話は言葉ではないという扱いである。記事では、「言葉よりも誠実、手引も売れ行き急増」とあり、「イラスト手話辞典」は放映後の1ヶ月半で8000部以上売れ、「わたしたちの手話」が通常の3割増で売れていると出版社の状況も

報じている。

「愛していると言ってくれ」の脚本は、北川悦吏子である。北川は、「手話の手の動き、指で表現することがきれいだな、とずっと思っていました。それでようやく書けたのが『愛していると言ってくれ』です。耳の聞こえない画家を演じた豊川悦司さんはものすごく手話を勉強して身につけ、耳栓をして撮影にのぞんでいました。常盤貴子さん演じる劇団員は彼と話したくて、一生懸命手話を覚えます。2人はわかり合えなさに悩むけれど、それは障害のせいではなく、人と人が対峙する恋愛だから。豊川さんにろう者を代表させたつもりはありません。でも、これで手話に興味を持ったという反響をたくさんいただきました」とインタビューに答えている¹⁴。恋愛ドラマの価値指向性を強調するための材料として、手話やきこえない人が登場しているのである。

「オレンジデイズ」（脚本は「愛していると言ってくれ」と同じ北川悦吏子）できこえない女性に恋をする役を演じた妻夫木聡は、小説版の解説に手話の魅力を語っている。

権（筆者注：役名）が恋した紗絵は耳が不自由という設定だったので、役作りのなかで手話を勉強できたのも新鮮でした。最初は大変だったけど、覚え始めたらもう面白くて、撮影とは関係ないときでも現場で使っていました。手話って、言葉を表す動作のひとつひとつに意味があって、その発想が面白い。たとえば、「愛してる」と「大切」という言葉の手話は同一で、その動作には“一緒になる”という意味合いがあるんです。それが自分的には興味深くて、物事の本質を見ることの大切さを改めて感じたというか。それに、言葉では簡単に嘘をつくことができるけど、手話の場合は自分の感情を手だけでなく表情や体全体でも表現するので、自分の気持ちも相手の気持ちも体で感じられる。だから、手話で話しているとホントに素直になれる気がしました（北川 2006）。

妻夫木は、手話は自分たちが使っている言葉、つまり音声言語とは違う表現の言葉であると認識している。前述の貴島プロデューサーの「手話の方が感情を強く、やさしく訴えることができる」でも、音声言語と比べて、手話には別の魅力があるという捉え方をしている。

ここで手話は、手まねと侮蔑的に言われていた時代から、言葉とは違うが魅力的なものであると見方が大きく転換している。この制作側の発想、つまり手話の魅力が、一般視聴者に受け入れられたのである。きこえない人の助けとなるために手話を覚えようという1回目、2回目の手話ブームとは異なり、手話そのものを「カッコいいもの」として評価している。

3.5 手話ブームと手話の多様性

テレビドラマをきっかけに起った手話ブームでは、新聞でも『星の金貨』に感動した「手話をやっている姿をみかけてカッコいいと思った」¹⁵などの新しく入会した手話サークル員の声を紹介されている。

しかし、きこえない人の側からは、「ろうあ者に興味をもってくれるのはうれしい。ただ、(ドラマで使われるのは)ろうあ者が生活で使う手話とは少し違う」¹⁶といった声も上がり始めている。

「手話は使う人によって表現が違う、生きた言葉です。本やビデオだけで勉強すると、そこで紹介されている手話しか分からない。自分の表現はできても、実際に聴覚障害者が使っている手話を読みとれない。ビデオの手話と違うからといって、中にはあなたの手話は違うと言い出す人までいます。聴覚障害者の手話を読み取るのは簡単ではありません」¹⁷と手話表現の個別性、多様性が指摘されるようになった。

1995年に発表された「ろう文化宣言」(木村・野澤 2000)も、この手話の多様性の主張のひとつと位置づけることができる。「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」と定義した。この宣言は、ろう者、難聴者、中途失聴者といったきこえない人を分断するものだと批判もされたが、ここで主張された、ろう者が使うのが日

本手話であり、難聴者や多くの手話通訳者が使うのが日本語対応手話という言説は、障害文化論としてもわかりやすいためか、2つの手話があると断言する論文もみられる¹⁸。しかし、全日本ろうあ連盟はこの分類を支持していない。手話言語はきこえない人が使う独自の言語だが、標準手話はあるものの、生きた言葉として個別性、多様性があるとしている。

また、「たしかに、聴覚障害者に目を向けて配慮して作られてドラマはうれしかったです。聴覚障害者もたくさん見ていました。手話を始める人が増えたことはいいことですが、手話を知っている人、興味のある人だけで、聴覚障害者の問題として考えてくれる人はまだ少ないのです」¹⁹ときこえない人の生活問題、コミュニケーションや情報獲得の機会の不平等、きこえないことで奪われた権利、手話通訳などにも目を向けてほしいとの願いが取り上げられるようにもなった。

難聴者の団体からは、「手話は学ぶ所が限られる。また周囲に難聴者とわかるため、習うまでに心のかっとうを乗り越えなければならぬ」として、補聴器や手話とともに、読話もコミュニケーションの有効な手段であることの主張も出た。「読話のためのビデオ」を制作し、「補聴器や手話と併用するとより効果的」²⁰としている。

また、「オレンジデイズ」では、主人公が失聴したのがわずか4年前という設定であるのに、流ちょうな手話話者となっていることに違和感を抱く難聴者もいた。

「私はドラマの主人公だった女子学生と同様、中途失聴者である。主人公は4年前に聴力のほとんどを失い、声が変わると笑われて話さなくなり、家族や友人とは手話でコミュニケーションをするという設定だった。ドラマはフィクションであり、どういうストーリーにしようかと自由だが、ドラマを見た人々が実情とは違うイメージを持たれたのではないかと恐れている。

まず、この主人公のような年齢で失聴した場合、声を出して話す人が大半である。

聴力が悪くなくても話す方は問題ないからだ。もう一つは手話である。確かに手話を使う中途失聴者はいるし、私も少しは勉強した。だが、手話を知らない健聴者とのコミュニケーションには役立たない。

手話をしない中途失聴者が耳に代わるコミュニケーション手段にしているのは筆談や要約筆記である。つまり、自分が情報を伝える時は声で、受け取るときは見てわかる筆談で、というのが一般的な中途失聴者といえるだろう²¹。

3.6 映像に現れるきこえない人

1987（昭和62）年に公開されたアメリカ映画「愛は静けさの中に」は、きこえない女性ときこえる男性のラブストーリーである。主演したマーリー・マトリンは、この映画でアカデミー賞主演女優賞を受賞した。きこえない俳優としてはじめての受賞である。以後、マーリーは様々な映画やテレビできこえない人の役として活躍している。この映画においても、きこえる男性がきこえない女性と話すために手話を覚えており、きこえる男性が自分の名前を呼んでくれるように話す場面がある。

この後、きこえない人が登場する映画やテレビドラマが、国内、海外の作品ともに複数紹介されるようになった。海外の作品では、1995（平成7）年、フランスのろう学校を舞台としたドキュメンタリー映画「音のない世界で」、1998（平成10）年、ドイツ映画の「ビヨンド・サイレンス」等がある。1997（平成9）年には、コミックを原作としたテレビ朝日「君の手がささやいている」が放送されている。生まれつき耳のきこえない女性が仕事や恋愛、きこえる男性との結婚、子育てに立ち向かい、成長していく姿を描いている。主人公の女性は、障害者雇用枠で大手企業に就職したという、これまでにない設定となっている。

1999（平成11）年には、きこえる人ときこえない人の共同演出、監督の映画「アイ・ラブ・ユー」が、公開された。この映画では、主人公のきこえない妻の役を、きこえない俳優の忍足亜希子が演じている。1999年1月3日の朝

日新聞では、「聞こえない世界、リアルに描くろう者と健聴者が協働で映画」と題し、「最近、人気タレントが看護婦を演じるテレビドラマが評判となり、手話ブームも起きた。しかし、現実の医療現場ではろう者の看護師は極めて少ないなど、ろう者の側には現実を十分には反映していない、との思いが残る内容だった」とし、「お互いの誤解を解き、心の垣根を取り払うには共同制作しかない。ろう者の役はろう者でやろう」と意見が一致したとしている。

これまでは、きこえる俳優がきこえない人の役を演じてきたが、きこえない人が、きこえない人の役を演じるという形が徐々に始まっている。

手話やきこえない人を、映像を通して見ることが増え、きこえない人や手話に対してのネガティブな見方は減少した。特にテレビドラマの影響は大きく、3度目の手話ブームでは、「手話は魅力的」ということが全面に押し出された。それは、恋愛ドラマの中でのコミュニケーションが上手くいかず、もどかしい思いをすることが、恋愛ドラマを盛り上げる材料となっていたことからくるものであるが、手話が「社会の中にあるもの」として浸透するという大きな役割を果たした。

1990年代から2000年代の第2期は、侮蔑的だった手話へのまなざしが、手話は魅力的な言葉である、手話を使うことがかっこいいとポジティブな方向に大きく変化した時期であるといえる。

それに対して、きこえない人の側からは、きこえない人の多様性、手話の多様性やきこえないことの周縁の課題の提示が行なわれるようになった。しかしそれらには、社会的にはまだそれほど目が向かなかった時期であるといえる。手話がかっこいいという認識は浸透したものの、手話を使って生活をしているきこえない人への関心は高いとはいえず、手話だけが一人歩きしているような状況となっている。

テレビドラマは確かに、きこえない人たちも見ていたが、当時のテレビには字幕表示機能はまだなく、手話による会話の場面には字幕が付けられていたものの、きこえる人（俳優）が声

だけで会話をしている場面に字幕が付いていたわけではない。そのため、声のみによる会話の場面は手話通訳がつくか、後から説明してくれる人でもいない限り理解できなかった。つまり、きこえない人が登場するテレビドラマであるにもかかわらず、手話の場面を除いて、きこえない人たちは、リアルタイムでは楽しめなかったのである。

4. 多様なきこえないこと、きこえない人

4.1 テレビドラマの設定の変化

2022（令和4）年10月から12月に放映されたドラマ、フジテレビ「Silent」では、主人公が「若年発症型両側性感音難聴」を患い、3年前からきこえなくなっているという設定である。きこえていた頃の主人公の男性を知っている女性が、きこえなくなった男性と再会後に恋愛関係を築いていく過程が描かれている。

この作品でも、きこえる女性がきこえない男性と話をするために手話を覚えようとする場面があるが、これまでのテレビドラマと大きく異なる点がある。それは、主人公以外に、生まれつき耳が聞こえない女性が登場したり、手話教室講師のきこえる男性が登場したりと、主人公と話すために手話を覚えようとする周囲の人ではなく、手話話者として最初から存在している人が登場するという点である。手話を母語としているきこえない人、手話を獲得、習得しようとしているきこえない人、きこえにくい人、手話を習得しているきこえる人、手話を学ぼうとするきこえる人など、手話技術の習熟度や使っている手話が多様な手話話者が登場し、主人公と同じ世代の若者だけではなく、多様な年代の手話話者が登場する。

「ろう者と中途失聴者と聴者ではわかりあえないのか」といったセリフがあり、これまで「きこえるか、きこえないか」だけで表現されてきたきこえない人が、主人公の存在によって、中途失聴者という新たなカテゴリーを登場させている。

また、きこえない俳優が2名出演しており、これは、きこえない人に配慮して制作された

「アイ・ラブ・ユー」等の映画を除けば、初めてと言って良い試みである。

ドラマの演出技法としても、きこえない人ときこえる人が2人でのいる場面で、きこえる人が独り言を声で言う場面では、完全に無音の状態とするなど、きこえない人にとってどういう場面かを見ている人が理解できるように演出がなされている。

手話のできない、きこえる人ときこえない人との会話では、手話や口の動きでは伝わらないことから、LINEでの短い言葉でのやり取り、スマートフォンの音声認識アプリケーション（音声を認識し、文字に変換するアプリケーション）を使って会話をしている。

きこえない人ときこえる人とのコミュニケーション手段の手話以外での方法は、第1期では、手帳など紙に手書きして筆談をするしかなかったが、第2期では、FAXが使われるようになっており、携帯電話の普及によりキャリアメールでの文字、文章のやり取りもできるようになっていた。その後、パソコンやスマートフォンでのビデオ通話により、画面上で手話での会話ができるようになり、さらに、2010年頃からはLINEなどのSNSを使った会話に近い形での文字での言葉のやり取りや音声認識のアプリケーションの使用という、技術開発によってきこえない人のコミュニケーション手段の方法が増えている。これらの技術開発は、きこえない人にとっては、大きな行動様式の変化をもたらしている。生まれつききこえない場合、音声から言葉を覚えることができないため、書記のみで日本語の文章が書けるようになるには相当の困難がある等、書記日本語の習得状況によって個人差はあるものの、書記日本語でのコミュニケーションが手書きの筆談しかなかった頃と比較して、かなり容易になっている。

「Silent」に続いて、テレビ朝日「星降る夜に」が2023年1月から3月に放送された。生まれつき耳がきこえない男性ときこえる女性のラブストーリーである。このドラマでも、きこえる女性は、きこえない男性と話すために手話教室に通い、手話を学ぼうとする。

この作品でも「Silent」と同様、主人公の他

にも手話を使うきこえない人や手話講師（ろう者が演じているきこえない人）、手話が堪能なきこえる友人など、手話を少しだけ使える店員など、多様な手話話者が登場する。

きこえない主人公が手話のできない、きこえる人とコミュニケーションを取る時には、スマートフォンの音声入力アプリの利用、スマートフォンやタブレット上での筆談で行なっている。

4.2 制作者側の意識変化

「Silent」では、ろう者考証に東京都聴覚障害者連盟が、中途失聴考証に認定NPO法人東京都中途失聴・難聴者協会が関わっている。

これまでのテレビドラマや映画では、手話指導を手話通訳者や手話で演劇等を行なっているグループ、演劇に携わっているきこえない人等の、特定の人やグループが関わっているのみであった。手話指導については、この作品でも同様であるが、それだけではなく当事者団体の考証が入っている。制作者側にきこえないことの多様性を反映させるための配慮があることがうかがえる。

「星降る夜に」に、手話指導で関わっているグループは、今までの手話が登場するテレビドラマとの違いを、圧倒的に世代が違うこと、小学校時代に手話の授業が取り入れられていたこと、そのため、多くの人が手話に触れたことがあること、手話がわからなくても「手話の存在」を理解していることを挙げている²²。

また、手話の世代による違いについても、次のように触れている。

今回、手話指導に入っている、ろう者善岡修は、NHK「みんなの手話」の元講師であり、元デフ・パペットシアター・ひとみ代表として、数々の舞台にも立ってきた手話のエンタメのプロである。彼の手話は、昭和の時代から培ってきたものだ。良き時代の、力強く温かい深みのある手話（ことば）を携えている。善岡が、全体のろう者の在り方を見守り、この作品の手話の根拠を支えている。

一方、俳優北村匠海さんが演じるろう者・一星は、20代のまだ若い役柄だ。一星の手話は、20代前半のろう者塚越貴仁が、すべての翻訳を担当している。指文字を取り入れた表現も多い。持って回った言い方もしない。私が若いころに学んだ手話とは違う。そして、先輩格の善岡ともその表現は違っている。「自分はそんな表現はしない。」「いや、若い人の手話は、これが自然だ」「なるほど、自分はこうやるけど、そっちの表現もいいね。」などなど、翻訳の現場では、この塚越と善岡の攻防戦ごと、みなで笑い合いながら、取り組んだ。手話にも、世代差は歴然とある。若者の手話に、年配のろう者が「あれは手話ではない。」などと嘆く場面も、よく見かける。そうした、言葉としての混とんと時代の変化が、手話の世界にもあふれている²³。

手話が生きた言葉である以上、きこえない人の中でも世代によって使う手話表現は異なってくる。言葉は時代によっても変化するもので、表現が違うから間違った手話というわけではない。手話には方言もあれば、いわゆる「若者言葉」もある。手話を覚えた年齢や成育環境、日本語の習得状況によっても異なる。

1990年代後半頃からろう学校など教育の場でも、教育で手話を使うことはしていなくても、手話が禁止されることは徐々になくなっており、きこえない人が手話を使うことは当たり前のこととなってきた（春日2021）。

きこえる人も、学校で手話を学ぶ経験を持つ人が増え、手話ができなくても、手話が社会の中にあるものとして受け止められるようになってきている。手話の多様性についても、手話が言葉として認識されたことで理解、受容されている。

また、「Silent」では、前述のテレビドラマ「オレンジデイズ」の主人公と同様、失聴してからそれほど時を経ていない中途失聴者といえる主人公が、流ちょうな手話を使うことについては、きこえなくなった後、生まれつききこえない人から手話を学んだためと、ストーリーの

中で説明されている。

しかし、「Silent」の考証に入った中途失聴・難聴者協会は「難聴当事者の立場から、不自然なところや中途失聴者としては少し違うなど、意見を出したが、制作担当者が意見に耳を傾けてくれ変更されたところもあれば、ドラマとして成立させるため聞き入れられなかった部分もあった」²⁴。

「ラブストーリーとしては成功かも知れないけれど、本質的なことは理解してもらえなかった。それでも関心を持ってもらい、知ってもらうことに意味があると考え、言い続けてきた。それが、いつかは難聴者、中途失聴者の正しい理解につながるから。これからも諦めないで続けたい」²⁵と一般的な難聴者、中途失聴者と作品の主人公の違いを訴えている。

中途失聴者、難聴者の苦しみは、自分は声で会話ができるのに、相手の話は聞き取れないことからくるものであり、主人公のように声を使わず、手話を主なコミュニケーション手段としている人はあまりいないことは、この作品では取り上げられなかった。

近年のテレビドラマでは、手話やきこえないことが恋愛を盛り上げる材料とする価値志向性は維持しながらも、主人公以外にも様々なきこえない人が登場してその多様性を提示し、多様性と対峙することの難しさを恋愛に絡めて表現するようになっている。

4.3 きこえない人の周辺を描く作品

アメリカで2021（令和3）年、日本では2022（令和4）年に公開された「コーダ あいのうた」は、きこえない両親ときこえない兄ときこえる10代の少女という家族の物語で、少女が家族から自立して遠方の大学に合格するまでの成長物語である。CODAである少女は歌が上手く、練習を重ねて音楽を学ぶために大学に進学しようとするが、歌の練習よりも両親や兄の手話通訳に時間を取られ、また、歌という、家族にはきこえない、わからないことを学ぼうとすることで家族からの理解がなかなか得られないという葛藤を描いている。きこえない両親が娘の歌を聞きにくるが、会場の他者の会

話や娘の歌声はきこえず、拍手もきこえない。拍手する周囲の人を見回す場面は、無音で表現され、きこえない人の感覚が伝わるようになっている。

この映画で注目されたのは、きこえない両親、兄の役をきこえない俳優が演じていることである。父親役を演じたトロイ・コッツァーは、アカデミー助演男優賞を受賞している。また、母親役のマーリー・マトリンは前述の1987（昭和62）年公開「愛は静けさの中に」で主演した俳優である。

2022年3月から5月には、NHKBS「しずちゃんパパ」が放送された。これは、きこえない父をもつCODAの娘が主人公である。父がきこえる人とかかわる時には、手話通訳をして、父と周囲の人をつないでいる。ふとしたきっかけで出会った男性と恋に落ち、結婚するまでの親離れ子離れの物語を描くホームコメディとなっている。この作品では、きこえない父ときこえる娘の手話でのやり取りは、一部字幕だが、きこえる娘がセリフとして父の手話を表現する手法が採られている。制作統括の松原浩、プロデューサーの戸倉亮爾は「ろう者やその家族は、ごく当たり前で生きている。彼らは、憐れむべき弱者ではない。その自然で力強い姿を、聞こえる娘の結婚というひとり立ちを通じて描き出したい。これは親子の愛情物語だ」²⁶と語っている。

2022年公開の映画「LOVE LIFE」では、前夫との息子と再婚した現在の夫と暮らす主人公のきこえる女性の前に現れる、韓国籍でホームレスの、きこえない元夫が登場する。きこえない元夫役をきこえない俳優が演じている。きこえない俳優の存在も少しずつではあるが認知され、起用されることが増えている。

コーダ、CODA（Children of Deaf Adults）は、2003（平成15）年にポール・プレストン著「聞こえない親をもつ聞こえる子どもたちーろう文化と聴文化の間を生きる人々」が日本でも翻訳・出版され、2009年には澁谷智子が「コーダの世界 手話の文化と声の文化」を出しており、最近では「ヤングケアラー」としても注目されるようになった²⁷。

これらのテレビドラマや映画では、きこえない人ときこえる人との恋愛を主体とするのではなく、その家族や周辺の人々の暮らしを描いている。きこえない俳優がきこえない人の役を演じることも増えてきている。手話も恋愛ドラマを盛り上げる材料のひとつではなく、現実生きるきこえない人やその周囲の人々が、会話の手段に使うものだという事を表現するように変化している。

5. おわりに

社会的に手話が認知されていく過程では、「手まね」といわれ、きこえない人を含めた障害者への侮蔑的で同情的な扱いがあった第1期から、1990年代以降の第2期には、「手話は魅力的」「手話はカッコいい」という受け止め方に大きく変化した。そして、現在に至る近年の

第3期では、手話が生きた言葉であり、その表現には個性があり、「多様な手話」があることがあることも提示されるようになった。

同時に、きこえない人へのまなざしも、「侮蔑的、あるいは存在しない」という見方から「手話という魅力的な言葉を使っている人」に変化し、さらに、ろう、中途失聴、難聴などの「きこえないことの多様性」があることの理解の難しさが共有され、そこから「マイノリティとどう付き合うか」という段階に進んできたといえる。

きこえないことの多様性は、個性が高く、他人からは見えない、見えにくい。「きこえない」とはどういうことなのかを理解することは、きこえる人にとっては非常に難しい。映像で強調される、会話の手段が違うというだけでなく、会話の場面以外でも、きこえる人であれば苦もなく獲得できる音声情報が入りにくい。

表1 本研究で取り上げた映画、テレビドラマ等の一覧

放送年又は日本公開年	メディアツール	タイトル	制作者（本研究で取り上げた、脚本、監督、プロデューサーを中心に記載）	主な出演者
1961年	日本映画	名もなく貧しく美しく	松山善三（脚本、監督）	小林桂樹、高峰秀子
1987年	アメリカ映画	愛は静けさの中に	ランダ・ヘインズ（監督）	マーリー・マトリン ウィリアム・ハート
1995年	日本テレビ	星の金貨	龍居由佳里（脚本）	酒井法子、大沢たかお
1995年	TBS テレビ	愛していると言ってくれ	北川悦吏子（脚本） 貴島誠一郎（プロデューサー）	豊川悦司、常盤貴子
1995年	フランス映画	音のない世界で	ニコラ・フィリベール（監督）	（ドキュメンタリー）
1997年	テレビ朝日	君の手がささやいている	岡田恵和（脚本）	菅野美穂、武田真治
1998年	ドイツ映画	ピヨンド・サイレンス	カロリーヌ・リンク（監督、脚本）	シルヴィー・テスキュー
1999年	日本映画	アイ・ラブ・ユー	米内山明宏、大澤豊（監督）	忍足亜希子、田中実
2004年	TBS テレビ	オレンジデイズ	北川悦吏子（脚本）	柴咲コウ、妻夫木聡
2022年	フジテレビ	Silent	生方美久（脚本）	目黒蓮、川口春奈
2022年	アメリカ映画	コーダ あいのうた	シアン・ヘダー（脚本、監督）	エミリア・ジョーンズ トロイ・コツッアー マーリー・マトリン
2022年	NHKBS	しずかちゃんとパパ	蛭田直美（脚本） 戸倉亮爾（プロデューサー）	吉岡里帆、笑福亭鶴瓶
2022年	日本映画	LOVE LIFE	深田晃司（脚本、監督）	木村文乃、砂田アトム
2023年	テレビ朝日	星降る夜に	大石静（脚本）	北村匠海、吉高由里子

（筆者作成、放送又は日本公開年順）

きこえない人も自身の「きこえない」状態がどんなものかは、きこえる人と比べて把握することになる。中途失聴であれば、きこえていた時の記憶と、きこえなくなった今の状態の間で苦しむこともあるだろう。コミュニケーション手段も多様で、その手段のひとつである手話にも多様な表現がある。

映像の中の手話やきこえない人は、その全てを表してきたわけではなく、きこえない人から見れば、自分たちの現実とは違うと感ずることも多いだろう。本研究の冒頭で取り上げた西田や春日の生育環境が示すように、きこえないことで奪われてきたことが多くあり、音声情報をリアルタイムに得られないことで生じる情報の非対称性は、容易には埋めることができない。情報を音声以外から得るためには、本人の努力や周囲の配慮が必要となる。

恋愛ドラマでは、しばしばきこえない人は会話の手段が異なるだけで、情報量はきこえる人と大差なく、思考様式についてもきこえる人と全く同じであるかのように描かれている。恋愛の価値志向性を重視することが優先されており、手話やきこえない人の多様性は示されるようになったとはいえ、きこえない人が抱える困難や社会生活の様子に忠実かといえ、未だ不十分であるといえる。

手話についても、手話が魅力的という評価基準とは関係なく、きこえない人のコミュニティや当事者団体、手話サークル等、きこえる人も含めた手話を使う集団の中では、言葉として当たり前に使われてきたことは描かれていない。その意味で、手話の多様性、きこえない人の多様性とはどういうものか、「マイノリティとどうつきあうか」という問いとの取り組みは、端緒についたばかりなのである。

それでも、手話が存在し、使われていることを社会に浸透させることには成功している。手話がかっこいいとされるようになったのも、手話の価値を高め、肯定的に認知されることに貢献している。

侮蔑的から、魅力的、さらに多様性の提示という、きこえないことやきこえない人の映像メディアにおける取り上げ方の移り変わりには、

きこえない人に対する社会のまなざしの変容が反映されている。この点で、テレビドラマや映画においてきこえない人や手話がどのように表現されてきたかということは、社会がそれらをどう受け止めてきたかを示すものであり、振り返るに値する。

ただし、本研究で取り上げた映画やテレビドラマの大半は、きこえる人を視聴者として想定したものであり、きこえない人が鑑賞することには配慮されていない。声だけの会話場面には手話通訳が付いておらず、字幕も、各家庭のテレビの字幕機能を使うほかない²⁸。

2022(令和4)年5月25日に施行された「障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通にかかる施策の推進に関する法律(情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法)」では、①障害者による情報の取得利用・意思疎通について、障害の種類・程度に応じた手段を選択できるようにすること、②日常生活・社会生活を営んでいる地域にかかわらず等しく情報取得ができるようにすること、③障害者でない者と同一内容の情報を同一時点において取得できるようにすること、④高度情報通信ネットワークの利用・情報通信技術の活用を通じて行なうことが理念に掲げられている²⁹。

近年のテレビドラマにみられるように、手話とともに様々なデジタルツールが使えるようになりつつある。本人が望む手段を提供できる社会になることが今後、共生社会の確立に必要とされている。「私は手話で」「私は要約筆記で」「この場合はアプリを使って」等、当事者が望む手段は人や状況によっても変わる。それらにどこまで対応できるのが課題となっている。

本研究では、きこえない人にわかるように配慮された映像メディアについては、きこえる人ときこえない人が協同演出し監督を務めた映画「アイ・ラブ・ユー」を除いて取り上げなかった。それは、きこえない人やその周辺の人々以外の、一般社会における訴求力や社会的認知、社会的浸透の過程を見ていくことを主眼としたためである。

きこえない人に配慮し、きこえる人もきこえない人も観ることを想定した上で制作している

ものには、NHK 教育テレビ（現・E テレ）の番組、一般財団法人全日本ろうあ連盟が関わっている映画、日本ろう者劇団の活動等、多くが存在する。これらには、字幕の付け方や手話通

訳の表示方法などを工夫してきた歴史、過程があると考えられる。これらについての調査や分析については、今後の研究課題としたい。

(注)

- 1 西田一『手話と補聴器で歩んだ道 医学生からろう学校教師へ』文理閣，1999年，45頁
- 2 西田上掲書 62頁
- 3 春日晴樹『はるの空 耳の聞こえない私は、音のない世界をこう捉え、こんな風に生きてきた』ジアース教育新社，2021年，32-33頁
- 4 障害者の権利に関する条約（外務省による邦訳を参照）https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html（2023年5月30日閲覧）
- 5 国際聴覚障害教育会議（INTERNATIONAL CONGRESS ON EDUCATION OF THE DEAF：ICED）は組織や内規を有する団体ではなく、研究者や教育専門家が情報を共有しネットワークを形成する会議である。
<https://www.jfd.or.jp/int/wfd/newsletter-2009-12.html>（2023年5月30日閲覧）
- 6 内閣府 障害者基本法
<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonhou/s45-84.html>（2023年5月30日閲覧）
- 7 内閣府「合理的配慮を知っていますか」リーフレット
https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai_leaflet.html（2023年5月30日閲覧）
- 8 『キネマ旬報ベスト・テン 85回全史 1924-2011』キネマ旬報社，2012年，170頁
- 9 1970年の手話奉仕員養成事業の実施要綱については以下を参照。社会福祉法人大分県聴覚障害者協会 <https://www.toyonokuni.jp/kyoukai/sisin4/>（2023年5月30日閲覧）
- 10 「手話通訳『目ざわり』県の課長指示で中断」『朝日新聞』1977（昭和52）年10月25日
- 11 「ろうあ協会長ら知事の陳謝拒否」『朝日新聞』1977（昭和52）年10月30日
- 12 「『手話』を芸術に高めて 体のすべてがせりふ」『朝日新聞』1979（昭和54）年9月4日
- 13 「銀行に『手話の窓口』」『朝日新聞』1980（昭和55）年12月6日、「三菱銀行首都圏14店舗に『手話の窓口』設置」『日本経済新聞』1982年5月14日等
- 14 「手話，日本語と異なる『言語』」『朝日新聞』2021（令和3）年10月17日
- 15 「若い世代に手話ブーム サークルに入会者続々 ドラマの影響か」『朝日新聞』1995（平成7）年8月31日
- 16 同上
- 17 「仲村喜一さんインタビュー 県ろうあ協会会長」『朝日新聞』1997（平成9）年8月25日
- 18 高島由布子「危機言語としての日本手話」『国立国語研究所論集』18号，2020年，121-148頁，齊藤道雄『手話を生きる：少数言語が多数派言語と出会うところで』みすず書房，2016年等がある。
- 19 「仲村喜一さんインタビュー 県ろうあ協会会長」『朝日新聞』1997（平成9）年8月25日
- 20 「難聴者団体が読話ビデオ」『朝日新聞』1996（平成8）年4月10日
- 21 「中途失聴 ドラマと違う現実知って」『朝日新聞』2004（平成16）年7月24日
- 22 「星降る夜に 手話指導特設ページ」手話あいランド <https://www.shuwa-island.>

- jp/hoshifuru_yoruni/ (2023年5月30日閲覧)
- 23 同上
- 24 一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会『『聞こえにくさへの理解』広がり』『SSK 難聴者の明日 全難聴機関誌 no.199』, 2023年4月
- 25 同上
- 26 「しずかちゃんとパパ 手話指導特設ページ」
<https://shuwa-island.jp/shizu-papa/>
(2023年5月30日閲覧)
- 27 ヤングケアラーは、澁谷智子によれば、様々な事情で家族の介護や世話をしている子ども（概ね18歳以下）を指す言葉である。コーダは、親がきこえないため、子どもの頃から親ときこえる人との間に立ち、手話通訳をしていることから、ヤングケアラーに含まれている。
- 28 家庭のテレビに字幕機能が付いたのは、地上デジタル放送になってからである。それまでは、一部の番組に各テレビ局が字幕放送を行なうことはあったが、試験的なものにとどまっていた。地上デジタル放送は、2003年12月から開始されたが、実質的に家庭に普及したといえるのは、地上アナログ放送が終了し、地上デジタル放送に切り替わった2011年7月であったと考えられる。
総務省「放送開始スケジュール」
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/dtv/kihonjoho/kihonjoho3.html (2023年8月22日閲覧)
- 29 内閣府「障害者による情報の取得利用・意思疎通に係る施策の推進」
<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/jouhousyutoku.html> (2023年5月30日閲覧)
- 《文献》
- 五十嵐大『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』幻冬舎, 2021年
- 生方美久『silent シナリオブック完全版』扶桑社, 2022年
- 大石静『星降る夜にシナリオブック』幻冬舎, 2023年
- 春日晴樹『はるの空 耳の聞こえない私は、音のない世界をこう捉え、こんな風に生きてきた』ジアース教育新社, 2021年
- 北川悦吏子『オレンジデイズ』角川文庫, 2006年
- 北川悦吏子『愛していると言ってくれ』角川文庫, 1997年
- 現代思想編集部編『ろう文化』青土社, 2000年
- 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社, 1981年
- 斉藤道雄『手話を生きる 少数言語が多数派日本語と出会うところで』みすず書房, 2016年
- 財団法人全日本ろうあ連盟『五〇年のあゆみ』財団法人全日本ろうあ連盟出版局, 1998年
- 難聴者の心理学的問題を考える会編『難聴者と中途失聴者の心理学 聞こえにくさをかかえて生きる』かもがわ出版, 2020年
- 澁谷智子『コーダの世界 手話の文化と声の文化』生活書院, 2009年
- 澁谷智子編『ヤングケアラー わたしの語り』生活書院, 2020年
- 西田朗子「きこえない人の意思疎通支援の意義と支援の専門性に関する研究—手話通訳の福祉的支援機能に着目して—」立命館大学大学院博士請求論文, 2022年
- 西田一『手話と補聴器で歩んだ道 医学校からろう学校教師へ』文理閣, 1999年
- ポール・プレストン『聞こえない親をもつきこえる子どもたち』現代書館, 2003年
- 米川明彦『手話ということば もう一つの日本の言語』PHP 新書, 2002年

The process of social recognition and transformation of sign language — Analysis of Social Background Focusing on Video Media —

Nishida Akiko

University of east asia
Faculty of allied health and science
Medical welfare major
(e-mail) a-nishida@toua-u.ac.jp

《 abstract 》

In this paper, I divide the period of social recognition of sign language into three periods and analyze changes in recognition of sign language.

Sign language was born and developed in schools for the deaf in the Meiji era, but after that, education in sign language was prohibited in education for the deaf, and education in the oral method continued for a long time. Despite deaf people have continued to use sign language as a means of everyday conversation.

After World War II, video media developed and movies featuring people who could not hear were made. The word “sign language” came to be used from “hand impersonation.” In Japanese, it changed from “temane” to “shuwa.” Before long, around the International Year of Persons with Disabilities, the number of people learning sign language increased again. This is the first phase.

There was an attitude of learning sign language out of a desire to help people who cannot hear.

From the 1990s to the 2000s, several television dramas featuring deaf people were broadcast. This is the second phase. The discriminatory views of sign language as “cool” and “attractive” have completely changed, and the way people view sign language has changed dramatically. On the other hand, the facts, and difficulties in life of the deaf were not taken up.

The third phase is the present, continuing from 2022. Multiple TV dramas and movies have shown the diversity of people with hearing impairments and the lives of people with hearing impairments, including those around them. In addition, sign language also has various expressions and diversity, and is transforming to show the problem of “how to deal with minorities” where people who can hear and people who cannot hear.

(keywords) sign-language, social awareness, cognitive transformation